特集

放射線治療看護の現状と今後

放射線治療の進歩とともに受ける患者数も増加し、かかわる医療者も多岐にわたり連携の構築がわれわれの診療において重要な役割を果たしている。連携のキーパーソンとなるのが看護師であり、すべての施設でさまざまな役割を担っているものの、その役割や業務は施設ごとに異なっている。

JASTROでは日本がん看護学会と共催し「がん放射線治療看護セミナー」を2006年2月に開始した。2018年9月の第27回までにのべ5000名余の参加者に、放射線治療にかかわる情報提供とディスカッションをおこなっている。

放射線治療看護に関する理解や期待もこの間に大きく変化し医療の高度化や専門化への対応を目的として、日本看護協会の資格認定制度において専門看護師制度におけるがん看護分野に加え、認定看護師制度のがん放射線療法看護分野が2010年6月より開始された。放射線治療施設で診療にあたる医療者には、がん放射線治療看護セミナーの運営や講師として、また教育機関での講義や臨床実習における指導など、放射線治療看護関わるにさまざまな協力や支援を続けていただいていることが現在につながっている。しかしながら放射線治療看護に関する現状および今後の方向性については、情報が十分とはいえない。

そこで放射線治療看護の専門性確立と制度の制定および充実に長年にわたり尽力いただいている荒尾晴恵氏にこれまでの歩みと昨今の状況について情報を提供いただき、専門看護師である後藤志保氏にがん放射線療法看護　特別関心グループSpecial Interest Groupの活動について紹介いただくこととした。がん看護専門看護師・がん化学療法看護認定看護師の資格をもつ越智幾世氏は2009年のがん放射線療法看護分野の認定看護師教育のスタートより教員として参加されており、認定看護師育成についてこれまでの経緯と今後に関する思いをまとめていただいた。

がん研究会　有明病院　放射線治療科　**角 美奈子**

放射線治療看護の専門性確立までの歩みと今後の展望
ー日本がん看護学会の取り組みからー

●一般社団法人　日本がん看護学会　副理事長　大阪大学大学院　医学系研究科保健学専攻　教授　荒尾 晴恵

放射線療法は専門家によるチーム医療で行なわれており治療を安全で有効なものとして患者に提供するために、看護師に期待されている役割は大きい。放射線療法の対象は、小児から高齢者までと幅広く、病気の進行もさまざまであり、対象を理解し、治療の完遂を支えるためには、基礎になるがん看護の上に、放射線治療に関する専門的知識と治療を受ける対象を包括的に理解する姿勢が必要とされる。

しかし、看護基礎教育において放射線療法看護は科目として位置付けされておらず、看護師は基礎教育終了後、個々に放射線療法看護の学習を行っている現状があった。日本がん看護学会の会員からは、チーム医療を行うにあたり、看護師自身がさらに専門的な知識と技術を持ちたいとのニーズを聞くようになった。2006年になって日本放射線腫瘍学会と日本がん看護学会が共催で放射線治療看護セミナーを開始し、放射線治療看護の質の向上を目指す教育的な取り組みが始まった。セミナーには全国各地から看護師が参加しており、専門知識の学習ニーズの高さが伺えた。また、この時期に「がん対策推進基本計画」において、放射線療法は、国全体で総合的、計画的に取り組むべき課題として明記され、放射線治療看護の専門家の育成が急務となった。

このような背景もあり、2007年に日本がん看護学会は、放射線療法看護の専門家の育成、放射線療法看護の専門性を確立する必要性から、日本放射線腫瘍学会の支援も受けながら、日本看護協会に放射線療法看護を新たな認定分野として申請を行った。

その結果、2008年に日本看護協会の認定看護師制度の認定分野に「がん放射線療法看護」が誕生し、教育が開始された。2010年には放射線療法看護認定看護師が誕生した。筆者は当時、日本がん看護学会の教育・研究活動委員会の委員として、認定分野の申請のための作業に関り拠点病院へのアンケートなども実施した。資料作成に関った筆者は、藤本美生氏、祖父江由紀子氏、内布敦子氏、小松浩子氏らとのディスカッションを通した一連の作業から、放射線治療看護の専門性とは何かを明らかにすることが出来たのではないかと考えている。放射線治療の専門的看護は、放射線療法の治療過程に対応して生じる患者とその家族の身体、心理、社会的問題をアセスメントし、治療効果を最大限に得るため、放射線療法の原理に基づき治療の完遂をめざし、有害事象を効果的に予防・緩和し、安全な放射線治療の実施を支援する専門的技術である。またこの中では、患者と家族のセルフケア支援という看護師の関りが重要であることも明確に出来た。

その後、日本がん看護学会は、『がん看護コアカリキュラム日本版-手術療法・薬物療法・放射線療法・緩和ケア-』を2017年に書籍化し、放射線療法看護の専門性の体系化に取り組み、放射線療法看護に必要なコアとは何かを明確にするに至った。

このような中、2017年に日本看護協会が認定看護制度の再構築を提示した。2018年に主な作業が進み、新たな認定看護師教育は2020年度から開始となる。制度の変更は、現在の医療の高度化、細分化に伴う看護の専門分化から、今後は、疾病構造の変化（複数の疾病を抱える対象の複雑化）、医療提供体制の転換（病院中心の医療から地域・在宅へ医療の場が移行）となるため、これらに対応できるようにするというものである。

変更のポイントは2点であった。1点目は、認定看護師に特定行為研修を加えることにより、認定看護師のアセスメントに基づく質の高い看護実践に加えて臨床推論、病態判断などの医学的知識をベースとした能力が加わることで、あらゆる場のニーズに応えることができる認定看護師を養成しようとするものである。日本看護協会は、新たな認定看護師制度の目的を「特定の看護分野において、熟練した看護技術及び知識を用いて、あらゆる場で看護を必要とする対象に、水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、看護ケアの広がりと看護師の質の向上を図ること」であると位置づけた。そのため、新たな認定看護師制度では、どの分野においても特定行為研修が義務付けられており、習得する特定行為は分野によって異なるものの、カリキュラムの大半で特定行為研修に関連した科目の履修をすることになっている。

もう1点は分野の再編である。がん看護領域の認定看護分野には、緩和ケア、がん性疼痛看護、がん化学療法看護、放射線療法看護、乳がん看護があったが、緩和ケア、がん性疼痛看護を統合して1つの分野とし、がん化学療法看護、放射線療法看護、乳がん看護をまとめて1つの分野に統合する再編の提示があった。

日本がん看護学会は、この統合に対して、がん医療においてそれぞれの認定分野は診療報酬にも位置づけられており、専門性が明確にされていること、さらにますます高度化されるがん医療において、専門性の高い認定分野の存続は不可欠であること、がん医療において認定看護師は重要な役割を担っており、統合することで、医療現場に混乱がおきるなどの理由から統合を再考してもらう要望書を日本看護協会に提出した。日本放射線腫瘍学会からも、放射線療法看護認定看護師の分野存続についての要望書を提出していただき、茂松直之理事長殿の迅速なご対応に心より感謝している。このような対応の結果、がん看護領域の認定看護分野は、緩和ケア、放射線療法看護、がん薬物療法看護、乳がん看護の4分野への再編となり、放射線療法看護、がん薬物療法看護といった、専門性の高いがん看護分野の統合を免れることができた。

日本がん看護学会は、これからの放射線治療看護について、次のように考えている。放射線治療は、益々複雑な治療計画立案を可能とした装置が用いられるようになり、結果として治療計画画像や照射方法が複雑になる。このような放射線治療の高精度化は今後さらに発展することが予測される。そのため、看護においても治療内容を理解した上での有害事象のアセスメントやセルフケア支援が一層複雑化する。このような高精度放射線治療において、治療計画に基づいた患者のセルフケア支援が実践できる看護は、広く浅い知識では対応できない。高精度化する治療に対応した看護実践において放射線療法看護認定看護師の存在は重要であり、その存続は必至である。

認定看護師制度の再構築は、今後も定期的な見直しが行なわれるようである。その際に、がん放射線療法看護認定看護師の必要性を提言できるように、放射線療法看護の専門性を明確にして、ケアの質に関るデータを蓄積していくことが必要と考えている。

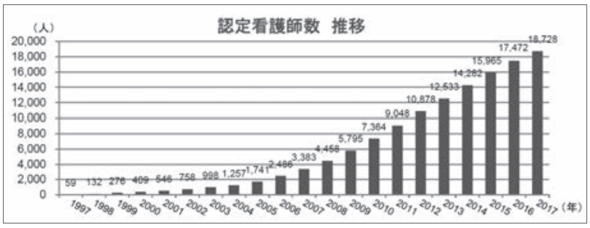
最後に、本稿をまとめるにあたり、日本がん看護学会の放射線療法看護の取り組みを振り返ると、放射線療法看護を体系化するプロセスにおいては、常に日本放射線腫瘍学会との強い絆に基づいた関係があったことを再認識できた。これまでの支援に、心から感謝するとともに、今後も両学会が協働し放射線治療、看護の発展にむけて、さらに関係を強化していくことができたらと願っている。このような振り返りの機会をいただけたことに改めて感謝申しあげたい。

がん放射線療法看護認定看護師

●京都府立医科大学医学部看護学科　大学院保健看護研究科　がん看護専門看護師・がん化学療法看護認定看護師　越智 幾世

わが国では、高齢化社会の進行などによって、今後もがんの罹患数が増え、死亡数も増加することが予測されている。厚生の指標である国民衛生の動向では、平成28年の悪性新生物による死亡数は約37万人であり、昭和56年以来第一位で増加の一途をたどっており、全死亡者に占める悪性新生物の割合は約28%である。しかし、その一方でがんの診断・治療法の開発は画期的に進み、平成28年にはがん患者の5年生存率の全国推計値（国立がんセンターによる）が62.1%に向上し、治癒率の改善に成果を上げていることが明らかになっている。昨今、注目をあびている免疫チェックポイント阻害薬は、その代表的な治療であり平成26年から本邦にて臨床で投与が開始となっている。このような医療の現場において、患者の状況に的確に対応した医療を提供するためには、医療専門職が連携し、多くの専門家で構成されるチームで医療を提供することが重要となる。看護における専門家が、専門看護師ないし認定看護師に該当する。

認定看護師とは 日本看護協会の認定部による認定看護師認定審査に合格し、ある特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護実践のできる者をいう。つまり、高度化し専門分化が進む保健、医療及び福祉の現場において、熟練した看護技術及び知識を基に、水準の高い看護を実践できると認められた看護師である。認定看護師の役割は、特定の看護分野において実践・指導・相談の3つの役割を果たすことにより、看護ケアの広がりと質の向上を図ることで貢献することである。実践とは、特定の看護分野において、個人、家族及び集団に対して、熟練した看護技術を用いて水準の高い看護を実践することである。指導とは、特定の看護分野において、看護実践を通して看護者に対し指導を行うことである。そして、相談とは、特定の看護分野において、看護者に対しコンサルテーションを行うことである。具体的には、専門的な治療や看護が必要な患者・家族に対して最適な看護は何かを考え、認定看護分野の専門知識に基づき判断し、実践を行う。また、他の看護師に対し、自らがロールモデルとなり専門知識や看護技術などを指導し水準の高い看護を行えるように働きかけたり、看護の現場で直面する問題や疑問の相談に乗り、改善策を導き出せるように努めたりして、認定看護分野の専門知識に基づき支援を行う。



〈日本看護協会ホームページより引用〉

看護分野として認定看護師制度委員会が認めたものは21分野であり、認定看護師の総数は 2018年7月24日現在、19,835名である。日本で初めての認定看護師は救急看護認定看護師と皮膚・排泄ケア認定看護師であり、上記のグラフで示すとおり、1997年に輩出された。そして、2010年6月に待望のがん放射線療法看護認定看護師（Certified Nurse in Radiation Therapy Nursing）30名が輩出された。2018年現在では、総数が274名となり全国で活動している。その活動の指針として、がん放射線療法看護認定看護師に求められる能力は、次の7つがあげられる。

1）治療方法について、その有害事象や予防、社会的資源の活用を含めた適切な情報提供により、患者の意思決定を支援することができる
2）病態および対象の特徴を考慮し、患者とその家族の心理的問題をアセスメントし、不安軽減をはかり主体的に治療に取り組めるようにするための心理的援助ができる
3）がん放射線療法の効果と有害事象についてアセスメントし、効果的な予防と症状緩和ができる
4）患者にとって最大の治療効果と必要な安全、安楽を確保するために、放射線療法の環境を整備することができる
5）施設内における放射線防護策についてのリーダーシップをとることができる
6）がん放射線療法看護の実践を通して役割モデルを示し、看護スタッフに対する具体的指導や相談に対応することができる
7）がん放射線療法において他職種によるチーム内の調整役として、患者の円滑な治療および在宅療養促進のための役割を担うことができる

私は、日本初の2010年のがん放射線療法看護認定看護師の30名の輩出において、京都府看護協会のがん放射線療法看護認定看護師教育課程の教員として関わった。全国に先駆けて名乗りを上げた京

都府看護協会に、全国から有望な看護師が集まり、2009年9月に教育課程が開校した。30名の研修生は自施設の放射線治療医や放射線治療技師などの専門家の期待を一身に背負っていた様であった。研修内容は、高名な放射線治療医やがん専門看護師による講義の連続であった。研修生は、書籍や文献検索等で目にする名だたる放射線治療医やがん専門看護師による講義を非常に熱心に聞き入っており、質問にも余念がなかったように記憶している。放射線治療医の土器屋卓志先生は、研修生にこれからのがん放射線治療看護の果たす役割について、医師の立場からの意見を語られた。研修生は、土器屋先生をはじめ講義をしていただいた多くの放射線治療医の先生方の期待に応えられることを目標に研修期間中は、たゆまぬ努力をしていた。臨地実習では、1期生であり先輩の放射線療法看護認定看護師はいないために、がん看護専門看護師の方々の指導を受けた。研修生は、大阪、京都、滋賀、奈良、兵庫の関西一円のがん診療連携拠点病院での実習を通して、これまでの自己の省察（リフレクション）を行い、がん放射線療法看護認定看護師にふさわしい新たな自分自身を再構築していた。共に涙を流した時もあり、教育課程での関わりは非常に思い出深いものになった。

がん放射線療法看護認定看護師教育課程の開設は、2010年には久留米大学、2012年には静岡がんセンターと続いた。遺憾であるが、京都府看護協会の教育課程は6期生で終了した。しかし、2018年度に新規開講予定である教育課程が、国立がん研究センター東病院と東京医療保健大学の2校ある。

冒頭で高齢化社会について述べたが、高齢化社会に伴い認知症を持っている患者も少なくない。さらに、がんのみではなく併存疾患を持ち合わせている患者も少なくない。これらのことから、機能温存にてがん治療ができる放射線療法は需要が増えると考えられる。複雑化している対象者に対しても適切な放射線治療を提供するためにも、がん放射線治療認定看護師はいなくてはならない看護の専門家であり、今後もますます活躍が期待される。

そして、高度な知識と卓越した技術、優れた看護実践と適切な倫理的判断力を備え、患者の視点を重視した認定看護師を育成することが、より社会に広く貢献できることに繋がる。現在、日本看護協会では認定看護師の見直しが行われている。放射線治療を受ける患者のケアに特化した知識や技術は、がん放射線療法看護認定看護師教育課程での研修で習得できるため、一人でも多くの看護師が目指すことを願う。

日本放射線腫瘍学会と日本がん看護学会共催で毎年定期的にがん放射線治療看護セミナーを開催している。今年の9月に日本科学未来館で開催された第27回がん放射線治療看護セミナーでは「肺がんの化学放射線治療と看護　～放射線治療と薬物療法の最新トピックス～ 」がテーマであった。演者にはがん放射線療法看護認定看護師も含まれており、より実践的なケアについて学習ができるセミナーにとなっている。がん放射線療法看護に興味のある看護師や、がん放射線療法看護認定看護師を目指そうと考えている看護師は是非参加していただきたい。セミナーの実行委員としてのメッセージとして括る。

〈京都府看護協会　がん放射線治療看護認定看護師教育課程　2009年度　開校式〉

SIG-RT（がん放射線療法看護　特別関心グループ Special Interest Group）の活動

●がん研有明病院　がん看護専門看護師　後藤 志保

SIGって何ですか？

日本がん看護学会のHP　(jscn.or.jp/sig/index.html）より抜粋しますと、特別関心活動グループ（以後、SIGとする）は、日本がん看護学会の組織内グループとして設置された学会員のための活動グループです。SIGは、日本がん看護学会会員が関心のあるテーマに集い、情報交換や学習活動をとおして切磋琢磨し、相互研鑽をおこない、テーマに関わるがん看護の質の向上に貢献することを目的としています。現在がん放射線療法看護やがん化学療法看護といった治療方法を特徴とするグループ、外来がん看護、在宅がん看護など実践の場を特徴とするグループ、遺伝がん看護、リンパ浮腫ケア、小児がん看護グループなど17グループがそれぞれ活動をしています。

がん放射線療法看護グループは、62名のメンバーで構成されています。（随時メンバー募集中です）

そして、この62名の中には、がん放射線療法認定看護師がたくさん参加しています。認定看護師の教育課程が開始されて、SIGグループメンバーが一気に増えました。もちろん、認定看護師以外にもがん専門看護師やがん看護学会の会員で放射線療法看護に関心がある人は誰でも参加ができますが、グループ活動において、認定看護師の果たす役割はとても大きいと思っています。それは、このグループ活動の目的である、情報交換や活動を通して相互研鑽を行い、テーマに関わるがん看護の質の向上を目指すためには、専門的知識、実践力を身に着けた認定看護師のリーダーシップが不可欠だからです。

SIGの年間活動計画でここ数年大きな柱となっているものが2つあります。1つ目は、毎年日本放射線腫瘍学会の時期などに合わせてSIGメンバーが集まり、学習会を開催しています。放射線治療部で勤務している看護師の数も少なく、施設間での情報交換や親睦を深める良い機会となっています。もう1つが2月に開催される日本がん看護学会学術集会にて、交流集会を開催することです。

交流集会って何をしているの？

交流集会は1～2時間の枠を自由に使って、テーマに関して発表とディスカッションを通じて看護の質の向上を図るセッションです。この交流集会を企画したきっかけは、認定看護師の教育機関が休講したり、研修生が少なくなった時期に「放射線療法看護ってこんなにいろいろなことができるんですよ、やりがいがあるんですよ！」と周囲に伝えようということからでした。がん放射線療法認定看護師、放射線療法に携わるがん専門看護師が日ごろの放射線看護の実践を発表しその専門性と看護の面白さを伝えました。その時は参加者が100名を超え、会場からあふれるくらいでした。配布したアンケートからも「もっと放射線療法看護について知りたい」「興味深かった」と日ごろ放射線治療にあまり関わりのない看護師からも反響を得て、私たちSIGグループメンバーは、これはいけるのでは・・・と手ごたえを感じました。それからテーマを「放射線療法の看護現場で活用できる、講演では聴けない『謎』にせまる」として、毎年の学術集会において、放射線治療でなぜ出血が止まるのか？　放射線皮膚炎ってどうケアをしたらいいのか？　骨転移の放射線治療ってどう効いているのか？といった内容について講師が実践例や研究結果をもとに講演し、フロアとディスカッションを行うことで、新たな知識を獲得し、臨床での看護に関する困りごと解決の糸口になればと交流集会を企画し、運営しています。

2017年度の交流集会では謎のなかでも特に皆さんの関心が高かった放射線皮膚炎を取り上げました。当日は立ち見の方も含め約200人の学会参加者のかたが来場してくれました。回収できたアンケートからは、放射線療法認定看護師だけでなく、他領域の認定看護師、病棟や外来看護師、教員や学生など様々な参加者の背景がわかりました。参加の動機では、「放射線療法について知りたかったから」「放射線治療について知る機会が少ないから」といったものがほとんどでした。学術集会においても、薬物療法や緩和治療といった内容の教育講演やセッションは多いのですが、放射線治療に関する話題やセッションはいつも少ないのが現状です。そして交流集会に参加した9割の人が「明日からの実践で役に立つアイディアが得られた」と回答していました。

放射線療法看護に関する知識やケア方法に関する教育は、基礎教育においても卒後教育においても少ない状況です。ますます治療方法は個別化され、高精度化されている一方、治療を受ける患者は高齢化が進み、看護師にも様々なセルフケア支援や治療に関する専門的な知識や根拠をもった実践力が必要とされています。交流集会でのがん放射線療法認定看護師の活躍は、そのような現場の看護実践の困難さの解決の糸口になるのではと考えています。

今年度の日本がん看護学会学術集会は2019年2月23日24日の2日間福岡で開催されます。SIG-RTグループからは、「あなたならどうケアする？ 事例から考える皮膚炎と粘膜炎」と題して、放射線治療の代表的な有害事象である皮膚炎と粘膜炎に対するケアを事例の画像をもとに、カンファレンス形式で検討する予定です。この交流集会では、がん放射線療法看護認定看護師による専門的知識を用いた症状の理解やケアの実際にもふれていただき、参加した放射線療法看護に興味のある看護師の実践がより豊かになることを目指して、日々の臨床現場でのがん放射線療法看護を考えたいと企画しました。このNEWSLETTERを読んで関心をもって学会にいらしていただけると、きっと認定看護師の日々の看護実践から多くのことを学べると思います。